

児童英語教授法と児童英語教育の実際について (1) 『小学校英語セミナー』における実践活動について

Teaching Methods of English for Children (1) Classroom Activities Discussed in *English Seminar for the Elementary Schools*

(2004年3月31日受理)

橋内幸子
Sachiko Hashiuchi

Key words : 児童英語, 児童英語教育, 『小学校英語セミナー』, 小学校の英語活動, 教材・教具の開発, 評価

抄 録

児童英語教育の現場, 特に現在の小学校における英語活動についての課題は多く, 指導書も数多く発刊されている。本稿では, 『小学校英語セミナー』(明治図書, 季刊誌)において展開されている特集を前提に, 英語活動の授業の組み立てに関する前提事項を確認する。まず, 創刊号に明記されている諸問題(英語活動の目標や年間指導計画, ティーチングの方法と指導体制づくり, 教材・教具の作成と教室の工夫, 評価と研究図書)を確認しつつ, 基本的な課題について考察する。まず, 「総合的な学習の時間」のテーマである「国際理解」と, 外国語学習への整備に向けての試みについて, 次に, 「英語活動に関する「教材・教具開発」と「評価」」に焦点を当てて, 検討する。

I. 序 論

『小学校英語セミナー』は, 1998年7月に明治図書より創刊された季刊誌(B5版, 80ページ)である。編集主体は, 影浦 攻氏(宮崎大学教授)が率いる小学校英語セミナーであり, 2003年12月に発刊された第18号までの内容は多岐にわたる。その毎号において, 影浦 攻氏による巻頭言の後には, 約50ページの特集と約30ページの連載シリーズが続く。小学校における外国語学習の高まりに合わせて, 2001年4月に文部科学省から, 『小学校英語活動の手引き』(*Practical Handbook for Elementary School English Activities*)が発行され, その結果, ますます「総合的な学習の時間」に「国際理解・外国語学習」をテーマとして採択する小学校が増えた。影浦 攻氏は, この『小学校英語活動の手引き』の作成協力者の座長を務めた人物であり, この有用な手引きの発行以前から, 小学校の英語活動についての指導と助言を続けてきた経緯を, 特に『小学校英語セミナー』の創刊号における展

開の広がりや教材・教具関連の記事に焦点を当てて, 辿ってみることにする。

『小学校英語セミナー』の特集を第1号から一覧すると, その時期に必要なとされたテーマと課題が認識できる。それらを列挙すると,

No. 1 -- 「ウォームアップ! 小学校英語活動・指導のアイテム21」[1]

No. 2 -- 「小学校英語活動・年間指導計画のモデル14」[2]

No. 3 -- 「子供熱中! 英語活動のおもしろ教材12」[3]

No. 4 -- 「どの子もイキイキ! 英語のおもしろ活動21」[4]

No. 5 -- 「英語活動充実! ティーム・ティーチングのアイデア15」[5]

No. 6 -- 「英語活動をもりあげる研究体制・環境づくりのモデル12」[6]

- No. 7 -- 「英語活動スタート 立ち上げの課題 2問21答」
[7]
- No. 8 -- 「これでOK! 英語活動に強くなる教師の研修術」[8]
- No. 9 -- 「だれでもすぐできる 英語活動の一押しネタ 14選」[9]
- No. 10 -- 「ALT&ゲスト・ティーチャーとの上手な連携のアイデア22選」[10]
- No. 11 -- 「英語授業で役立つ活動づくりのアイデア」
[11]
- No. 12 -- 「英語活動を盛り上げる展開演出の工夫」[12]
- No. 13 -- 「年間計画づくりのポイントと実例集」[13]
- No. 14 -- 「子どものニーズにあった教材開発のアイデア」
[14]

- No. 15 -- 「手軽で効果的! 楽しい活動特選24プラン」
[15]
- No. 16 -- 「知って役立つ英語活動指導の急所」[16]
- No. 17 -- 「子どもの英会話力をつける構想&マネジメント」[17]
- No. 18 -- 「英語活動が楽しくなる教具づくりのアイデア」
[18]
- No. 19 -- 「英語活動を充実させる取り組みのポイント」
[19]

となっている。そこで、本稿では、これらの特集の意義と貢献を考慮しつつ、『小学校英語活動の手引き』が発行された2001年4月を一つの転換点として、それ以前と以後に二分して、教材開発と評価を中心に追跡していくことが目的である。

II. 国際理解・外国語学習への整備に向けての試み

『小学校英語活動の手引き』が発行された2001年4月までに刊行された『小学校英語セミナー』は、1998年7月発行の第1号から2001年2月発行の第10号までの10巻である。1998年には、公立小学校における英語教育に取り組む研究開発校が、既に全国都道府県で各1校ずつ指定されて、授業関連の研究を行っていた。それは、第15期中央教育審議会の答申（1996年7月）における「小学校における外国語教育の扱い」に提唱された内容に従い、各小学校がそれぞれの教育方針や授業の展開を模索していた時期である。つまり、小学校における外国語教育は、

- ①教科として一律に実施はしない、
- ②国際理解教育の一貫として、総合的な学習の時間や特別活動などの時間を充てる、
- ③英会話や外国の生活・文化などに親しむ機会として活用する、
- ④各地域のネイティブ・スピーカーや海外生活経験者の活用を図る、
- ⑤中学校における英語教育の前倒しとして、文法や単語などの知識を教授することは避ける、

などが重点項目として挙げられていた。これらの項目は、中学校と高校における英語教育とは異なり、英語教育を含む国際理解教育に対する、各小学校のそれぞれの工夫と努力の余地を大幅に残したものであることが見て取れ

る。従って、小学校教師、小学校以外のさまざまなレベルの英語教育関係者や教育機関、英語学習テキスト関連の出版社、などが、それぞれのスタンスでもって、この壮大な教育計画に参画し始めたわけである。

『小学校英語セミナー』第1号は、以上の状況下で創刊された。この創刊号の巻頭言で、松川禮子氏（岐阜大学）は、「小学校英語で今後何が課題になるか」の中で、検討が必要とされる項目として、

- ①どのような英語を教えるか、
- ②指導体制をどう作るか、
- ③指導者の養成と研修をどうするか、
- ④教材開発、

の四点を列挙している。それぞれの項目において、これらのことは慎重に熟慮しつつ計画案を練り、準備に時間をかけ、その上で実際の教育現場での生徒や教員の反応と反省を絶えず必要とすることばかりである。一方、小学校英語セミナー委員会の代表である影浦 攻氏は、この創刊号の最後を飾る記事「小学校英語活動で何をどこまでやるか」の中で、外国語学習を含めた国際理解の学習が収めるべき射程を図表にしたものを掲げている。[20] つまり、国際理解教育は、単に学校という教育機関を中心にしたもののみではなく、学校をめぐる社会組織や家庭の中で生徒が参加でき、国際理解について学習

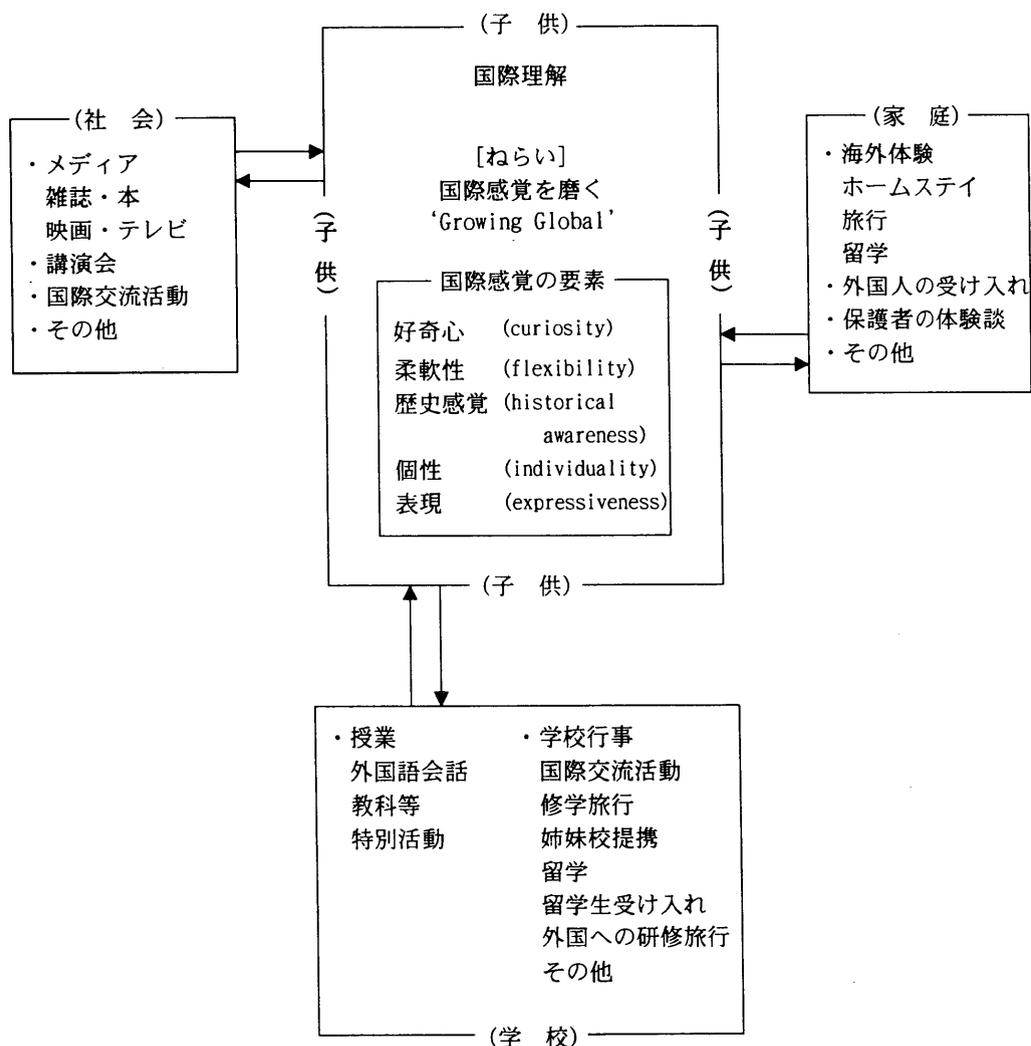


図1 小学校における国際理解教育の分野

機会が持てる場と時を利用すべきものであることを示したのである。例えば、国際交流活動などの社会活動、外国人の受け入れやホームステイなどの家庭を中心とした経験、などが挙げられよう。しかし、小学校の中で組織的・継続的に実施される英語学習をめぐる活動は、指導計画の立案から、指導の評価に至るまで、長期的な視野で考察する必要がある。

小学校英語活動における英語活動には、まず、児童が外国語を学ぶ時に共通する年齢的特徴を考慮に入れる必要があり、中学年（9～10才）までの児童に関しては、Jeremy Harmer (2001) の主張のように、それは、次の7つに収斂されよう。[21]

- They respond to meaning even if they do not understand individual words.
- They often learn indirectly rather than directly -- that is they take in information from all sides, learning from everything around them rather than only focusing on the precise topic they are being taught.
- Their understanding comes not just from explanation, but also from what they see and hear and, crucially, have a chance to touch and interact with.
- They generally display an enthusiasm for learning and a curiosity about the world around them.
- They have a need for individual attention and

approval from the teacher.

- They are keen to talk about themselves, and respond well to learning that uses themselves and their own lives as main topics in the classroom.
- They have a limited attention span; unless activities are extremely engaging they can easily get bored, losing interest after ten minutes or so.

つまり、「個々の単語が理解できなくとも、意味の理解が可能」であり、「周囲にあるあらゆるものから学ぶ」姿勢があり、「説明と五感で理解」し、「身近なものに対する強い関心」があり、「教師から認められること」に敏感で、その意識は「自己中心」で、集中できる時間は普通「短い」。従って、「想像力」と「発見の楽しみ」を持った、この時期の児童には、クイズ、もの作り、絵を描くこと、ゲーム、身体を動かす活動、歌、などを取り入れた外国語学習が効果的であることも、Harmerは確認事項として述べている。一方、高学年にあたる11～12才に関しては、思春期前期の児童として、自我の形成の始まりとともに、教室内では教師よりも級友の存在が重要な要素になっていることや、コミュニケーション主体の活動に向けた傾向が出てくる。グループ別の活動においては、MI(Multiple Intelligence) theoryの視点も考慮すべきものもあると思われる。

創刊号の特集「ウォームアップ！ 小学校英語活動・指導のアイテム21」は、あらゆる分野の機関誌における創刊号が持つ、包括的な展望と強い意欲にあふれた試みのアイテムであるといえよう。特集は21の項目から成っているが、およそ四分野ともいえる分けが可能となっている。つまり、

- ①英語活動の目標や年間指導計画、
- ②ティーチングの方法と指導体制づくり、
- ③教材・教具の作成と教室の工夫、
- ④評価と研究図書について、

である。

まず、①英語活動の目標や年間指導計画、については、後藤淳子氏が「目標設定の要点と工夫」において、子どもの発達段階や活動の特性に応じた目標設定を論じ、鹿倉勝子氏が「年間指導計画作成の要点と工夫」の中で、コミュニケーションの基礎力養成のための年間計画の実

施結果を報告、市村栄美子氏が指導案の実際を「指導案作成の要点と工夫」で示し、学習活動の種類と展開方法については、外山裕之氏が図表を作成しつつ、「活動の種類と展開方法」で、英語活動の楽しさを描いている。小学校と中学校の英語指導の相違は、学習指導要領の有無と、小学校では音声中心の指導を心がけることや、生徒のニーズを把握しておくことなどを、竹崎優子氏が、「中学校英語とのちがいと指導の考え方」の中で確認している。一方、総合的学習の時間以外の特別活動の時間に行う英語活動では、主に国際理解教育を中心に設定しており、その要点は、古川郁子氏の「特別活動での英語活動の進め方」に示されている。

②ティーチングの方法と指導体制づくり、に関しては、小池敏子氏が「チーム・ティーチングの種類と展開方法」の中で、HT(HRT)(学級担任)、JTE(日本人英語教師)、及びALT(外国人語学指導助手)のそれぞれの特性と役割を明確にしたうえで、〈HT+ALT〉、〈JTE+ALT〉、〈HT+JTE+ALT〉のチーム・ティーチングの組み合わせについて説明している。小学校で生徒を熟知している学級担任の役割をより詳しく述べたものは、菅野美智子氏の「学級担任の役割と出番の工夫」である。そして、原博明氏は「ALT・JTLとの協力の要点と工夫」で、授業前の打ち合わせの重要性を強調している。また、三上雅生氏は「教師の研修と指導力養成の工夫」の中で、マスメディアの利用、定期的な研修、学校独自のカリキュラムの確立を主張している。「指導体制づくりの要点と工夫」で、大久保直志氏は研究組織の確立の検討を行っている。英語活動の時間の確保については、山中秀夫氏が「授業時間運用の方法と工夫」において、授業時間の少なさのために常時活動の工夫を紹介している。

③教材・教具の作成と教室の工夫については、高村由美子氏が、「教材の種類と活用方法」の中で、学習教材の種類を児童の学習に適したもので、つまり、視覚や聴覚を使ったり、身体表現を伴う教材を中心に活用方法について検討している。「雰囲気づくり・場づくりの要点と工夫」については、田中佳世子氏が、校内・教室環境づくりの工夫として、英語活動ルームの設置を提案している。また、楽しく効率的な授業展開には不可欠な教具・教材に関しては、佐藤広幸氏が「教具づくりの要点と工

夫」の中で、ゲームやリズム遊び、ごっこ遊びなどの疑似体験やスキットのための小道具の使用と作成について述べている。生徒たちに対して、教育効果が望める視聴覚教材については、山海庄氏は「視聴覚教材の見つけ方と活用法」の中で、さまざまな教材を楽しく使用することに留意するように述べている。

①評価と研究図書については、井上久明氏による「子ども・親の期待のとらえ方・生かし方」の中で、ゲームや英語の歌、ごっこ遊びや英語の発音などについての子どもたちの好き嫌いに関するアンケートなどで評価を試みている。「英語嫌いをつくらない要点と工夫」では、著者の岩田れい子氏は生徒たちにとっての過度の緊張や負担を避けつつ、彼らの反応を観察しながら、学習を進めていくことの大切さを明言している。また、研究図書に関しては、研究教育機関へ出向いたり、出版社の目録やインターネットからの情報などを利用することと、活用に関しては模倣、自分なりの工夫、比較検討後の実行、などが必要になるが、それは、高岡秀夫氏が「研究図書の見つけ方と活用法」の中で、提案している。研究授業の実施や評価などについては、佐々木敦子氏が「研究授業の見方、生かし方」で、研究授業実践にいたるまでの流れと、授業記録のとり方、事後検討の方法などについて、報告している。そして、林次郎氏は、「評価の仕方・進め方」の中で、小学校の英語活動が、児童の意欲付けが最優先されること、児童への評価は普通の学力評価ではなく、むしろ、活動に対する取り組み姿勢に関するものになっていること、などを挙げている。そして、生徒による自己評価カード（英語カード）の実例を紹介している。

『小学校英語セミナー』には、特集の他に二種類の連

載記事がある。創刊号から掲載されているのは、「小学校英語学習活動ライブラリー」とその他の講座の種類の記事である。まず、創刊号の小学校英語学習活動ライブラリーには、“特選イベント・アイデア情報①”として‘カデナエレメンタリースクール交流イベント’、“特選ゲーム・アイデア情報①”として‘英語表現に親しむ「Nice to meet you」ゲーム’、“特選クイズ・アイデア情報①”として、‘世界天気旅行をしようーお天気クイズで、楽しく世界旅行！’、“特選歌遊び・アイデア情報①”として‘歌って あそぼう’、“特選スキット・劇遊びアイデア情報”として‘What story is this?’、そして、“特選リズム・チャンツ・アイデア情報”として、‘チャンツしようよ！’、などが掲載されている。

次に、講座の連載は、“小学校英語の研究開発校実践情報”として‘岐阜・穂積町立生津小学校の実践’、“これを知っていると役立つクラスルーム・イングリッシュ①”として‘あいさつの言葉’、“学級担任の英語指導力パワーアップ研修講座①”、“これだけは身につけたい英語活動指導のテクニック①”として‘生きた英語のシャワーを’、“すぐに役立つ指導案の作り方・生かし方講座①”として‘気楽に作ろう、指導案’、“すぐに役立つ年間指導計画のモデルと解説講座①”として‘総合の時間を活用した「英語に慣れ親しむ活動」’、“英語活動チーム・ティーチングの運営マニュアル①”、そして、“小学校英語活動では何をどこまでやるか①”と続いている。

以上、『小学校英語セミナー』創刊号に関しては、総合計で37編の記事から成立している。以後、これまで、この季刊誌が小学校現場の教師にとって、いかに役に立つ情報や視点、技術的なノウハウや助言、などを提供してきたかは、言うまでもないことであろう。

III. 英語活動に関する「教材・教具開発」と「評価」について

小学校以下の児童にとっての英語活動には、さまざまな教材・教具が必要である。学習の目標設定、年間計画立案、指導案の作成、指導者の確保、学習環境の整備、などの場合と同様、対象者である生徒の反応を注意深く観察しながら選択・作成に努めねばならないものである。つまり、小学校の児童の発達段階（低学年、中学年、高学年）と興味の所在、英語学習の段階、指導者の方針、

などに合わせていくことになる。本学の英語コミュニケーション学科開講の児童英語教育関係科目「キッズ・イングリッシュ」でも、ここ三年間、教材作成は一つの興味あるプロセスとして位置づけることができる。イラスト入りの簡単なカードを自力で作成する際でも、絵を描くことに自信のない学生は多少、抵抗を示したが、説得して、完成後、各自のカードを黒板に展示する頃になると、

教材作成をずっと続けたいと希望するようになるのが常であった。そこで、やはり、児童英語教育に携わる人材を養成する上でも、現場ではどのような工夫がなされているかを確認する必要があると思われた。

『小学校英語セミナー』の創刊号でも、教材と教具についての小論文がそれぞれ一つずつ掲載されている。高村由美子氏の「教材の種類と使用方法」では、まず、対象とする児童の特質との関連において、「遊び感覚で楽しめるもの」、「能動的に関わりを持てるゲーム的な要素のあるもの」が望ましいと規定されている。市販の教材でもかまわないが、必要に応じて手作りするのが良く、目や耳などを使って活動する教材（ビンゴゲーム、フルーツバスケットなど）、身体表現を伴う活動用の教材（‘Seven Steps’, ‘Head, Shoulders, Knees and Toes’, などの手遊び歌）、自己表現活動を体験する教材（自己紹介など）などを用意するのが望ましいとされている。教具については、佐藤広幸氏が、「教具づくりの要点と工夫」において、学年別（低学年、中学年、高学年）に区別された活動で、‘学習内容にあったもの’、‘児童の心をひきつけるもの’、‘その場の雰囲気があらわれるもの’、そして、‘個に対応できるもの’、という基準に当てはまるものを選ぶように勧めている。特に、クラス全体のテーマに向かって、児童が自分で教具を作成し、楽しい学習活動に役立てるということも興味ある提案である。

そして、1999年2月に刊行された第3号の特集は、「子ども熱中！ 英語活動のおもしろ教材12」であり、教材について、さらに詳細な検討と実践の結果を発表している。この第3号の巻頭言で、編集代表の影浦 攻氏は英語活動での教材開発の原則として、

- ①子どものニーズをとらえる、
- ②音声を中心にする、
- ③体を動かし、遊び感覚を取り入れる、
- ④生活に密着した英語に限定する、
- ⑤基本的な英語に限定する、
- ⑥体験を広げる楽しい活動を造る、
- ⑦子どもの国際感覚を磨く、

の七点に焦点を当て、児童の発達段階に対応する教材における基本的な基準を明確にした。これらの項目への努力は、児童英語教育の他の教育活動全般においても求められることである。そして、具体的な教材内容について

は、鈴木理生氏が「子どものニーズを第一に」との副題のもとに、内容の分類をしておくことをポイントとして挙げ、具体的に七つの項目を列挙している。それらは、

- ①日常生活で欠かせないもの（挨拶、数、色、形、服、など）、
- ②もっとも身近な存在であるもの（身体、家族、友達、など）、
- ③身近で親しみやすいもの（動物、昆虫、植物、季節、遊び、趣味、など）、
- ④家庭生活に関わるもの（家庭行事、一日の暮らし、など）、
- ⑤学校生活に関わるもの（学習、学校行事、お楽しみ会、など）、
- ⑥社会生活に関わるもの（買い物、電話、案内、社会行事、など）、
- ⑦異文化に関わるもの（外国の踊り、食事、季節、家庭・社会行事、など）、

となっている。

学年別の活動と教材選択・作成については、1年生から6年生までの各学年にとって望ましい内容を選択し、どのように展開するかが、この号では特集として、かなりの紙数がさいてある。まず、1年生には、「あいさつ」と「かずあそび」がテーマとして取り上げられている。近藤千代氏による「「あいさつ」のおもしろ教材と展開」では、まず、導入として、英語の歌 ‘Hello, Hello’ や ‘Good Morning’ を使い、生徒たちを円形に並ばせ、動作をつけて踊るようにさせる。次に、HRTが朝・昼・夕の基本的なあいさつを絵カードで示しつつ、ALTが英語で言う。その後、生徒たちが教室を自由に歩き回って、友達たちに元気にあいさつをする。この表現をより楽しい活動にもっていくために、簡単で単純なゲームを使って、あいさつ表現を繰り返して定着させる。展開案としては、その時間的展開を、‘児童の学習活動’、‘JTE/ALTの支援活動’、‘学級担任の支援活動’に分けて、それぞれの分担と役割を明記している。もう一つの授業例は、数に関するものである。佐藤克浩氏は「「かずあそび」のおもしろ教材と展開」の中で、1から10までの数を遊びの形で教えるヒントを提示している。あいさつの場合と同様、まず、数に関する遊び歌 ‘Ten Little Indians’ を使い、歌詞の one, two などの表現に

あわせて、児童が順に着席状態から立ち上がる、などの動作で、数についての英語表現の確認をする。数は、ゲーム遊びを取り入れやすい学習である。“How many?”と聞きながら、数を確認できるものとして、‘Ball game’ (運動会の玉入れ)や‘Fishing’ (魚釣り競争)などを、その単元の学習の毎時間に一つずつ行っている。

次に2年生に対する教材と展開の例としては、荒武真由美氏が教材作成の第一のポイントとして、児童のニーズを挙げ、テーマとして、子どもが好む‘どうぶつ’を取り上げている。まず、英語の歌から、導入し、聞くだけで歌えるような曲の選定をする。歌詞の中の動物に関する表現などは、後で会話形式で発音もさせ、動物の絵カードやアニマルバスケットを使って、クイズやカードゲットゲームをする。また、佐々木彩子氏は、同じく2年生に「たべもの」をテーマにした授業実践を報告している。活動としては、八百屋にあるものを選んで、ALTが発音する時間を組み込んだ数種のビンゴゲームで遊びつつ単語数を増やし、絵カードを使って、‘Is it a ()? Yes, it is./No, it isn’t.’の表現を、質問と答えを言うグループに分けて練習させている。2年生になると、簡単な感想も表現できるので、授業の終了時近くに、児童による‘学習の感想発表’の時間を設け、次回の学習への動機付けにしている。

3年生になると、初歩的な‘双方向のコミュニケーション’を可能にする試みが始まっている。丸山登美子氏による「宝物紹介」に関する授業では、開発校として1年次からの学習の実績をいかし、自己紹介の表現として、自分が伝えたいことの一つとして、自分の大切にしている宝物を紹介する英語学習をした。ALTや友達に対して、実物を持参し、日本語とジェスチャーを含めて紹介する活動である。使用される表現は、‘I have a ~’である。授業では、特別教室ともいえる‘ESSルームに「入国」し、授業が始まり、授業が終わる前に各児童に用意されている‘自己評価’の小冊子(「パスポート」サイズ。後で、JTEが点検して、シールを貼るもの)に感想を記入させ、授業終了とともに「出国」させる。これは、非常に興味あるセッティングで、他の英語活動でも使用できるアイデアであろう。また、日野恵子氏は、「色遊び」の授業で、特に色の英語表現が出てくる歌‘My Balloon’を使って、活動をした報告をしている。

最初の1番に出てくる色であるredを、blue, yellow, green, pinkなどに変えていき、歌にジェスチャーをつけて歌わせる。ゲームも‘宝さがし’であるTreasure Huntなどをするが、児童がゲームの競争的要素に感情を害さないように工夫がされており、これも心理的な側面で常に配慮すべき点でもある。

4年生の活動例として、「学校」をテーマにした報告を山花悦子氏が行っている。学習活動のタイトルは、「学校オリエンテーリングを楽しもう」で、学校内の場所についての表現を学び、外国人のゲストが来校した際に説明や案内ができるようにする、という、やはり、これもコミュニケーションが目標となったものである。場所の絵カードを取り合う‘ハンカチ取りゲーム’や、‘Who has ~ card? Game’, ‘Let’s go ~ Game’など、方向や動作の指示表現も含めて学べる活動である。また、水田伊都美氏の実践例では、「買い物」がテーマになっている。買い物は、挨拶、買う物の名前や数、価格についての英語表現を学べるものでもあり、有効に活用できる単元である。単語や‘What’s this?’など答えの口頭練習などには、タンバリンを使ったり、買い物をする児童には、かわいいカゴを持たせたり、店には看板をかけるなど、さまざまな用意も必要になる活動であるが、学習する児童たちの歓声が聞こえてきそうな授業設定になっている。

5年生ともなれば、さらにコミュニケーション活動へ重点が移されることが可能になってくる。山中茂明氏は「趣味」を題材に、主に‘会話型’の授業の組み立てを実践している。発達段階に応じたゲームの工夫として、低学年には‘インプット・ゲーム’(聞き取り型)、中学年からは‘アウトプット・ゲーム’(発話型)、そして、高学年からは、‘トーク・ゲーム’(対話型)が望ましいとして、その全段階のゲームを取り入れている。つまり、「趣味」の話題(‘What is your hobby?’ ‘My hobby is ~’)を、まず、聞き取り型、次に発話型、最後に対話型のゲームとして、5時間の授業内に収めている。そして、小野寺由紀氏は「道案内」をテーマに活動をさせている。まず、建物の名前、道の尋ね方、道の教え方、そして、ゲーム形式で‘模擬体験’を学習するという形式である。当然、道案内のための地図が必要となり、作成する地図を活動用にいかに便利に描くかも課題であろう。

そして、6年生ともなれば、ゲームもコミュニケーションのためのものになる。佐藤広幸氏は「家族」を題材とし、それを対話型のゲームになるように工夫している。使われているゲームは、①‘ファミリーバスケットゲーム’、②‘セブンアップゲーム’、③‘インタビューゲーム’であり、①で家族の名前の英語表現に慣れ、②で家族紹介の表現に慣れ、③で家族についての質問の仕方について慣れるようにさせる。そして、最終的な仕上げとして、外国人ゲストを招待し、趣味や家族のことについてインタビューをする順序になっている。‘Who is this?’ ‘This is my ~’などの英語表現の学習やHRTやALTによるPresentationを経て、練習やゲームで表現に慣れた後に本番に臨むことは、無理のない学習である。次に、「お天気、季節」をテーマにした英語活動は、浜地裕子氏の授業報告によるものであるが、‘教師自ら英語を楽しむ’ことの大切さをまず確認した後で、‘お天気キャスター’という設定から始めている。教材として、段ボール箱で作ったテレビ、日本地図（大・小）、効果音（雨の音や雷の音など）、お天気カードなどを使って、‘Today in Osaka, it’s cloudy.’などの英語表現を学習する。

以上、『小学校英語セミナー』第3号の特集記事である教材について、1年生から6年生までの実践報告をたどってきたが、このような試みと反省の積み重ねが、20

01年の『小学校英語活動実践の手引き』に結実していることは明らかである。その後、『小学校英語セミナー』第14号（2002年5月発行）では、特集として、「子どものニーズにあった教材開発のアイデア」が生まれ、第18号（2003年12月発行）では、同じく特集として、「英語活動が楽しくなる教具づくりのアイデア」が掲載された。

まず、第14号の特集で検討された‘子どものニーズにあった教材’としては、

- ①楽しさのあるもの、
- ②発達段階にあったもの、
- ③創造性が発揮できるもの、
- ④楽しい発見のあるもの、

という視点が必要とされている。その視点と配慮の上に、開発と展開の例として、①日常生活教材、②食べ物教材、③行事教材、④人間関係教材、⑤季節教材、の五項目に分類されて、それぞれの項目で、低学年、中学年、高学年について、一つずつ、計三つの記事が組まれている。

①日常生活教材に関して、低学年では、‘Do you have ~?’の表現をスキットや4コマまんがを使って練習し、中学年では‘What’s wrong?’の表現を、体を使った活動中心のものを使い、リズムチャンツや、ジェスチャーゲーム、などを通して学び、高学年では英語劇で日常生活を表現することも提案されている。

②食べ物教材に関しては、低学年では、‘What’s

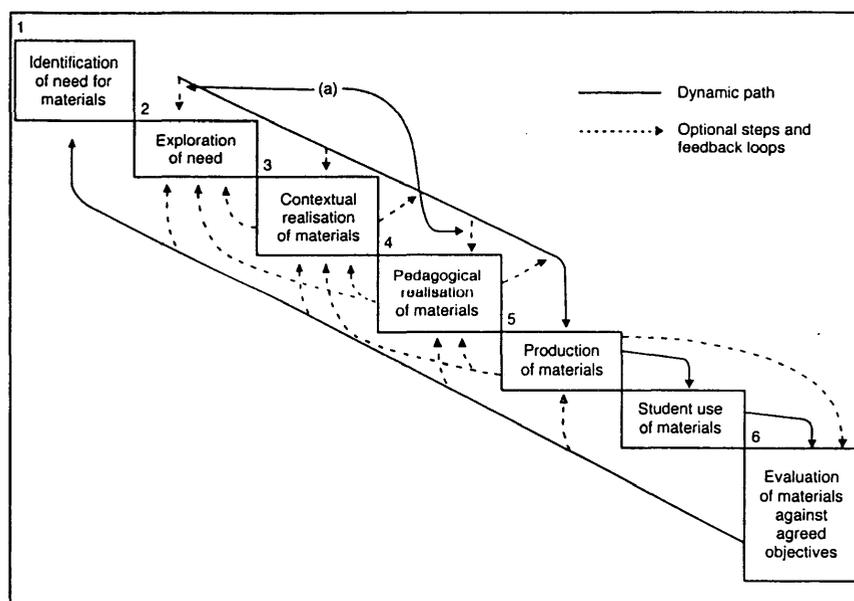


図2 教材やテキストの開発と評価のプロセスと関連性

your favorite food?’の題材名で、食べ物カード使用のゲームを楽しみ、中学年では、レストランなどでの料理を注文する時の表現をスキットで練習、高学年では、日本料理や日本の食べ物を紹介するビデオレターの作成について紹介している。③行事教材については、目標とする英語表現を中心に、運動会の競技種目を活動に入れる低学年の活動、外国の遊びを紹介する中学年の学習、バレンタインデーを楽しむ高学年の取り組み、などがある。④人間関係教材に関しては、一緒に買い物と野菜料理を作るというロールプレイをする低学年の活動、友だちの家に行って家族の紹介をする設定の中学年の学習、ALTの体験談などを理解する機会を持った高学年のクラス、などが述べられている。⑤季節教材では、生活科との関連を使って、自然などに見られる言葉を学ぶ低学年の試み、秋という季節を題材にして、例えば、紅葉した木の葉を集めたりして、秋を楽しむ活動を英語学習に生かす中学年の活動、春の宿泊学習を英語学習の機会にした高学年の行事、などが紹介されている。

教材やテキストの作成、使用、評価などに関しては、絶えざる検討と反省などが不可欠である。このことは、Ian McGrath (2002) の図示において、明らかである。
[22]

また、『小学校英語セミナー』第18号の特集、「英語活動が楽しくなる教具づくりのアイデア」には、総括的なヒントとして、‘子どもの遊びを生かす工夫’、‘百均（百円グッズ）は教材のお宝の山’、‘果物で楽しく英語に親しむ’、‘文化に親しませる工夫’、などが挙げられている。具体的な教具作りと活用のアイデアとしての事例は、①クイズ、②ゲーム、③スキット、④体験活動、

の四種類について、に写真付きで具体的に述べられている。まず、①クイズについては、「クイズには必ず正解がある」ことを共通理解としておく必要がある。まず、低学年用の指導として、3連のパネルを使用して、ジェスチャークイズの劇の効果を出す工夫、中学年には、「この人だあれ?」というクイズで、該当する人物の特徴を英語で言って当てさせるもの、高学年には‘宝探しクイズ’で、道案内用の英語表現の学習とともに、正解の場所にあたる絵をめくると宝の絵があるという仕掛けのある、楽しい活動がある。②ゲームについては、低学年には、動物の名前などをあてるゲームをする場合、答えを引き出すためのイメージを絵カードで示す工夫などについて、中学年では、同じゲームでも正解の物に触って推測する場合やグループ別カードの使い方、高学年では、英語をコミュニケーションのために使う活動のためのゲーム、例えば、パスポートゲーム用のカード作成の際の要点などが、説明されている。③のスキットでは、簡単な挨拶の練習の時にさいころや絵カードを使う低学年のクラス、友達たちが興味を持っているものや好きな物をインタビューする時に使う絵カードを自作させる中学年の場合、生活科で使った電話を英語のコミュニケーションにも使って音を聞くことに集中させる高学年の例など、がある。④の体験学習では、レジャーシートの使用や牛乳パックによる動物ミニハウスを手作りさせる低学年の例、国旗カードを使ったパズルを楽しむ中学年のクラス、そして、レストランで使う表現をロールプレイするための絵カードを自作させて親しみを持たせる高学年の場合、などが簡潔に述べられている。

III. 終 わ り に

日本において、小学生を対象にした児童英語教育は緒についたばかりであり、文部科学省、小学校の教育現場、学外の教育産業などのさまざまな方針による実践や改革などが、絶えず議論されている。音声中心の楽しさを全面に出した英語活動を、いかに組み立てて、準備し、教室で活動させ、今後に備えるかについて、『小学校英語セミナー』は、1998年から5年以上も報告してきた。最新号（第19号）の特集にもさまざまなアイデアが提案さ

れているように、小学校の教育現場での英語活動については、「目標の明確化と設定、年間計画作成、教材開発、ALTとの連携、学習環境、教具作成、評価」などの項目別に検討する必要がある。そして、今後の課題としては、これらの現場での試みについて、応用言語学や発達心理学、認知科学などの多方面の視点からの考察がなされることである。小学校における英語の必修科目化に対する課題は山積しているのである。

注 記

1. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 ウォームアップ！ 小学校英語活動・指導のアイテム21. 小学校英語セミナー（1998）1, 10-51.
2. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 小学校英語活動・年間計画のモデル14. 小学校英語セミナー（1998）2, 10-51.
3. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 子ども熱中！ 英語活動のおもしろ教材12. 小学校英語セミナー（1999）3, 16-51.
4. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 どの子もイキイキ！ 英語のおもしろ活動21. 小学校英語セミナー（1999）4, 16-55.
5. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 英語活動充実！ ティーム・ティーチングのアイデア15. 小学校英語セミナー（1999）5, 14-49.
6. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 英語活動をもりあげる研究体制・環境づくりのモデル12. 小学校英語セミナー（2000）6, 13-39.
7. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 英語活動スタート立上げの課題21問21答. 小学校英語セミナー（2000）7, 12-45.
8. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 これでOK！ 英語活動に強くなる教師の研修術. 小学校英語セミナー（2000）8, 18-43.
9. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 だれでもすぐできる英語活動の一押しネタ14選. 小学校英語セミナー（2000）9, 16-43.
10. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 ALT&ゲスト・ティーチャーとの上手な連携のアイデア22選. 小学校英語セミナー（2001）10, 6-47.
11. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 英語活動で役立つ活動案づくりのアイデア. 小学校英語セミナー（2001）11, 10-43.
12. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 英語活動を盛り上げる展開演出の工夫. 小学校英語セミナー（2001）12, 4-43.
13. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 年間計画づくりのポイントと実例集. 小学校英語セミナー（2002）13, 4-43.
14. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 子どもニーズにあった教材開発のアイデア. 小学校英語セミナー（2002）14, 4-43.
15. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 手軽で効果的！ 楽しい活動特選24プラン. 小学校英語セミナー（2002）15, 4-43.
16. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 知って役立つ英語活動指導の急所. 小学校英語セミナー（2003）16, 4-43.
17. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 子どもの英会話力をつける構想&マネジメント. 小学校英語セミナー（2003）17, 4-43.
18. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 英語活動が楽しくなる教具づくりのアイデア. 小学校英語セミナー（2003）18, 4-43.
19. 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会：特集 英語活動を充実させる取り組みのポイント. 小学校英語セミナー（2004）19, 4-43.
20. 影浦 攻：小学校英語活動では何をどこまでやるか. 小学校英語セミナー（1998）1, 79.
21. Harmer, J.: The Practice of English Language Teaching. 3rd Eds., Pearson Education Ltd. Essex (2001) p.38.
22. McGrath, I.: Materials Evaluation and Design for Language Teaching. Edinburgh University Press, Edinburgh (2002) p.195.

Bibliography

- 1) Doughty, C.J. and Long, M.H.: The Handbook of Second Language Acquisition. Blackwell Publishers Ltd., Oxford (2003).
- 2) Ellis, R.: The Study of Second Language Acquisition. OUP (1994).
- 3) 後藤典彦, 富田祐一:「はじめてみよう！ 小学校・英語活動」, アプリコット (2001).
- 4) 五島忠久監修:「Q & A形式による児童英語指導法ハンドブック」, アプリコット (1900).
- 5) 原田昌明, 右田邦雄:「英語指導のアイディアバン

- ク」, 研究社 (2002).
- 6) Harmer, J.: *The Practice of English Language Teaching*. 3rd Ed., Pearson Education Ltd, Essex (2001).
- 7) 服部孝彦, 吉澤寿一: 「英語を使った「総合的な学習の時間」—小学校の授業実践」, 大修館 (2002).
- 8) 樋口忠彦編: 「小学校からの外国語教育」, 研究社 (1997).
- 9) 伊藤克敏: 「こどものことば」, 劉草書房 (1990).
- 10) Johnson, K. and Johnson, H. eds.: *Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics*. Blackwell Publishers Ltd., Oxford (1998).
- 11) 影浦 攻編: 「小学校英語教育の手引き」, 第3版, 明治図書 (2001).
- 12) 影浦 攻・小学校英語セミナー委員会: 「小学校英語セミナー」, 明治図書 (1998-2004), 1-19.
- 13) 柏野恵理子, 名合智子: 「いっしょに始めませんか 小学校英語活動—理論から実践へ—」, 松香フォニックス研究所 (2003).
- 14) 久埜百合: 「困ったときのこども英語相談室」, 改訂版, ピアソン・エデュケーション (1999).
- 15) 久埜百合: 「子ども英語救急箱」, ピアソン・エデュケーション (2002).
- 16) 松畑 一編: 「早期英語教育」, 大修館 (1983).
- 17) 松香洋子: 「小学生は英語が大好き 2 実践編」, 松香フォニックス研究所 (2003).
- 18) McGrath, I.: *Materials Evaluation and Design for Language Teaching*. Edinburgh University Press, Edinburgh (2002).
- 19) 文部科学省: 「小学校英語活動実践の手引」, 開隆堂 (2001).
- 20) 中本幹子: 「実践家からの児童英語教育法 実践編 AB, CD, 解説編」, アプリコット (2003).
- 21) 中山兼芳編: 「児童英語教育を学ぶ人のために」, 世界思想社 (2001).
- 22) Paul, D.: *Teaching English to Children in Asia*, Pearson Education, Hong Kong (2003).
- 23) Scott, W. A. and Ytreberg, L. H.: *Teaching English to Children*. Pearson Education Ltd., Essex (1990).
- 24) Slattery, M. and Willis, J.: *English for Primary Teachers*. OUP, Oxford (2001).
- 25) 辻 幸夫編: 「ことばの認知科学事典」, 大修館 (2001).